

第 66 回朝活かみいち 報告

進行役：毛利友美さん

題目：その人らしさを求めて

～知的障害者の支援に携わって思うこと～

日時：17 年 4 月 20 日(木)7 時～8 時

場所：M's cloud (上市文化研修センター)

参加者：21 人(町内 10 人、初参加 4 人)

本報告では、当日の発言主体の記録に加えて後提出の感想文をも(巻末に)掲載しました。

◆ まずは恒例となっている参加者の自己紹介です。今回は、進行役のリクエストにより「障害者とかかわり」について、種々の立場から思いが語られました。中にはさらに時間が必要だと思われる熱弁もありました。以下に列挙します；

- ・身近に障害者がいる。仕事上よく接する。
当事者意識・関心が高い。
- ・建築的な面から障害者の配慮した設計をしたが、
障害者が床をなめるという実態に驚いた。
- ・フィンランドの多様性を認める社会システム。
フィンランドでは幼少期に適正な支援が行われ、障害者の個性を生かす教育が行われている。
- ・障害者の表記の仕方に関する疑問。
障害者の「害」の字はひらがながいい。
- ・障害に関心あり、勉強したい。

冒頭から皆さん、まだ語り足りないくらいで、関心の高さが伺えました。

◆ 毛利さんは保育士を目指されておられましたが、障害者施設での実習体験をされたことで、自分の進路は福祉と決め、現在は社会福祉法人「けやき苑」に勤務されています。

今回は、仕事を通して考えてきた障害者問題「障害者とは、その人らしさとは」について、問題の視点を「障害者の意思決定の難しさと支援者の葛藤」に設定してお話をされました。以下に項目を箇条書きにして記します。

(1) その人らしさ

一人の人間として自分の生き方には、自分の意思を持ち自分で選択して生きていくことです。しかし、障害者には自分で判断したり、自分の思いを周辺の人に伝えたりすることが難しいのです。

(2) 意思決定困難な障害者と支援者の葛藤

障害者を持つ家庭の母親の会話から紹介。

母親：「なーん決めれん。このくらいなんで出来んのか。」
これは母親が作り上げた思い込みであり、それによって本人と福祉支援者とのずれが生じてきます。

(3) ずれ

障害者はまずご自身の家庭から受け入れられていない場合が多いです。

(4) 周りの人の理解と対応。

まずは皆さん、ずれに気づくべきです。これは、障害者本人の生活を考えることから始まります。

- ・答えをひとつに絞らず。種々方法があると考えます。
- ・「やってあげるのではなく、一緒にやる」という姿勢が必要です。自分自身の実感です。

- ・ずれの解消が障害者本人にとって安心感や達成感が生まれ、次につながっていきます。

(5) 障害者が本人らしい生活の実現に向けて

- ・障害者のことをもっと知ってほしいです。
- ・障害者を健常者と分けなくていいくらいです。
- ・決めつけなければ日常で普通に生活が可能はずです。障害者が健常者と同じように生活できるようになることを望んでいます。

(6) おわりに

障害者は障害があっても夢や希望を持って生きていけるようにしたいものですと、力強く締めくくっておられました。

◆ 質疑応答

話題提供の後に質疑応答になり、多くの方々が種々の立場で発言し、討議ラリーが終了時間を越えても続きました。いくつかの質問を以下に列挙します。

- ・フィンランドで子どもの図画工作授業を見学しました。そこでは粘土でミカンを作っていました。我々なら丸い外形をもってミカンというようにしますが、障がいのある子どもはミカンの房(ミカンの皮をむいた後の 10 個ほどの果肉の入り袋)を作ってからミカンの外皮をかぶせます。なぜか。彼らがミカンの皮をむいて各房を食べることを通じてミカンを認識しているからです。

- ・障がい者を持つ家庭では、障がい者を家庭で囲い込んでしまいがちです。それは障がい者年金に頼る生活をしているためで、障がい者を施設に入れる経済的余裕がないからです。これは経済的な虐待そのものといえます。

- ・障がい者が人やものにあたると犯罪ですが、それでもそうした行為が障がい者にとっては何か意味を持つはずです。ひとつの価値観しか認めない日本社会が障がい者の思いを汲んでいないと思います。今は多様性の社会と

いわれている割には残念です。

- ・近くのお店に障がい者の方がおられます。そこで買い物すると決まって(高い方に)計算間違いをされます。でもその額をいつもお支払いしています。(会場からはなんて優しい人なのでしょう、の声あり)

- ・障がい者の文字表記について、害の字は使わないほうがいいと言う指摘がありました。続いて、障がい者の方からは、外の人(健常者)が結構気にされておられますが、少なくとも私は何も気にならなりません。周りが障がい者を特別視しているように感じます。

- ・健常者が障がい者を作っています。

- ・「こうしてあげてください」が障がい者へ支援ではなく、障がい者と日常一緒に暮せるようにすることが支援そのものだと思います。

- ・障がいというものが何も感じない普通に暮らせる社会が一番いいと思います。

- ・普通とは何、当たり前とは何ですか。先入観や既成概念で障がい者を見ていることこそ問題です。

◆ まとめ

今回の趣旨はこの種の問題を知ってほしいとのことでした。皆さんは、進行役の話題提供に基づいて各自様々な視点から議論を行い、問題の本質を捉えておられました。これを編者流にまとめさせていただきます；

- ・障がい者の日常社会への参画について、普通とか当たり前をどのように考えていくのか。

- ・障がい者がむしろ社会によって作り上げられている実情にどう対処していくのか。

以上をもってむすびといたします。

最後になりましたが、進行役の毛利さん、参加の皆さん、M's cloudの薄田さん、どうもありがとうございました。

■■ 感想文

朝活かみいちの評判を聞いて東京から参加された建築家の人から感想文をいただきました。ご紹介します。

朝活の感想ですが、
先ず、早朝にも関わらず、皆さん頭はフル回転という感じで、心地良い緊張感でした。

講師を務められた毛利さんの「知的障害者の”自分らしく生きる”」というテーマは、最初、特殊な事例報告かと思っていたのですが、それを通して、「普通」って何だろう、「生きる」ってどういうこと、「社会」って何、と、どんどん主題が深まっていき、最後の質疑応答では、

参加された皆さんがそうした問題を自らに引きつけ、具体的に日常の中でどうなのかを話されていました。

”自分らしく生きる”は、あまりにも当たり前のことで、ともすれば、日常の雑事、押し寄せる情報に流され、見失って(見誤って)しまいがちなことですが、かつての建築の道を歩み始めた頃のことを思い出し、改めて自分の半生を振り返る機会になりました。

皆さんに巡り会えたことに感謝し、今後の皆さんの活躍、会の発展に期待する次第です。

追加：障害者の「がい」についても先の方が語っておられましたので、ここに記します；

・言葉とは考えるための道具です。日本語の場合、漢字について当用漢字の数に制限を設けたこともあり、定義や概念規定がきっちりとされなくなり、今日に至っております。障害者については障碍者という字を使うべきです。害と碍は全く意味が異なっています。害は社会にとって邪魔者という意味であり、碍はハンディキャップやハードルという意味です。言葉を使う側の姿勢が問題となっている事はいうまでもありません。ちょっと理屈を述べました。

